

動き出す学校と先生たちの実践レポート

アクティブラーニング

# AL型授業への挑戦

昨年末の中央教育審議会の答申において、高等学校教育の改革として「主体的・協働的な学習・指導方法であるアクティブ・ラーニングへの飛躍的充実を図る」と記されました。弊社の調査※では、約47%がアクティブラーニングなどの授業改革に取り組んでいるが、学校組織として取り組んでいるのは8.7%とまだわずか。そこで今号より、学校としてアクティブラーニング型授業（以下「AL型授業」）に取り組みはじめた事例を紹介する連載をスタートします。

企画協力／小林昭文(産業能率大学 教授) 取材・文／長島佳子 撮影／杉浦康之



## 第1回 小杉高校(富山・県立)

### School Data

1919年創立／全日制総合学科／生徒数475人(男子139人・女子336人)／進路状況(2014年度実績)大学36.5%、短大21.8%、職業訓練大学校1.3%、専門学校32.7%、就職7.7%



### 米谷和也前校長

現・富山県立高岡高校校長。1982年に富山県射水市(旧新湊市)の新湊小学校から教員キャリアがスタート。その後、中学校教員を経て、1991年から富山県の高校教員に。県立伏木高校教員時代に進路指導主事を経験する。1999年より富山県の未来財団勤務を経て、2002年富山県教育委員会の総務課(後に教育企画課に名称変更)に赴任。2007年から県立有磯高校で教頭を勤めた後、2009年富山県教育委員会で県立学校教育課改革推進班の班長に着任。2012年より小杉高校校長。地域の小中学校と連携しつつ、時代に適合する授業改革を推し進め、2015年4月より現職。

強力なリーダーシップのもと、変化の時代に  
対応できる人材育成を目指す

教員の成長があつてこそ  
生徒の成長が実現できる

小杉高校は3年前に米谷先生が校長として赴任した時、AL型授業へと大きく舵を取り始めた。

「小杉高校は総合学科として20年目。総合学科の制度ができた94年は、高校教育の多様化を目指した時代でした。しかし、02年の『学びのすすめ』で基礎・基本の学力が重要視され、こうした変化の中で、岐路に立たされていると感じたのです」

変化の激しい時代を生き抜く力を生徒に身につけさせ、時代の変化に対応する学校にするには、教員自身の指導力を高めることが必須と考え、学校全体での授業改革に取り組み始

めた。その一つがALの導入だった。

導入に向けての米谷先生の動きこそがアクティブだ。文部科学省の研究指定校に手を挙げ採択。グループワークは小中学校の方が進んでいたため、中学校の先生にも指導を請う。さらにAL型授業の啓発活動を行う小林昭文先生を産業能率大学まで訪ねて、自校での研修や若手教員の直接指導を直談判した。

現場からは戸惑いもあったという。「個々の考え方があるので足並みが揃わなくて当然。無理強いはいしません」「生徒を成長させる授業をする」が、『生徒を成長させる授業をする』ことは、教員全員の共通目標であるはずなので、その方向性には同意してもらい徐々に広がっています。そして一人でもやるよりチームや組織で取り組ん

### 小杉高校のアクティブラーニング型授業への取り組みの歩み

小杉高校の能動的な授業の素地は、1995年に同校が総合学科として生まれ変わったときから、キャリア教育と課題研究を授業に取り入れたことからスタートしている。2012年に米谷先生が校長として赴任後、2013年に文部科学省の「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における「学力の定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究」の研究指定校に採択。以後、外部のスーパーバイザーによる研修や授業研究会等を行いながら教員の指導力向上を図っている。(写真は本年2月に行われた、小林昭文先生によるAL研修)



だ方が相乗効果があります。生徒に『いまの時代はチーム力が重要だ』とグループワークをやらせるのに、教員ができれば説得力がありません」最初は失敗しても、根気よく継続することが重要だという米谷先生は、この4月に高岡高校に転任。授業改革の風土が根つき始めた小杉高校は新たなメンバーを加え、さらに改善の輪が広がっていくだろう。

※小誌Vol.406 P28参照 「高校生の進路指導・キャリア教育に関する調査2014」(リクルート進学総研)



## 教員3年目 斉藤匠平先生

### 数学A(1学年<sup>※1</sup>)

教員志望であったものの、ものづくりの仕事も経験したいと思い、2009年大学院を卒業後、民間企業に就職。製造業の生産管理職を経験した後、2013年に教員に転身、小杉高校に赴任。教員としてのモットーは「何事も楽しく、日々成長」。



「振り返りシート」の  
効果は絶大。シートの活用で  
わからないことを具体化できる

個々の生徒をよく見つめて  
自分も変化・成長したい

この日の授業は一次不定方程式。複数ある解き方の一つを斉藤先生が板書で解説した後、生徒たちはグループに分かれて解いていく。解けた生徒はわからない生徒に教えるが、「わからない人同士でも、話し合っているうちに解決策が見つかるかもしれないよ」と先生が声をかけると、いろいろな案を出し合っていく。グループワーク前は質問を促しても誰も手を挙げなかったが、グループになると先生を呼び止め質問を浴びせかけていた。

授業の最後には必ず「振り返りシート」<sup>ダウンロード</sup>を書かせる。シートには「わかったこと」「わからなかったこと」を書く欄がある。

「振り返りシート」を具体的に書いた生徒ほど次のテストの点数が着実に上がっています。A-L型授業を始めてから生徒が楽しそうに、寝ていた生徒も起きます。以前授業中に寝ていて

## 教員8年目 黒田圭先生

### 国語総合A(1学年<sup>※1</sup>)

高校時代、国語の授業が楽しく小説のおもしろさに目覚め、国語教員を目指す。2008年県立新川みどり野高校(定時制)に着任後、2014年から小杉高校で教鞭を執る。モットーは「自分を表現することの喜びを、生徒たちに伝えたい」。



A-L型授業の要素は、  
優れた先人も実践していた  
実は基本中の基本だった

生徒が集中して考えるために  
最低限の声かけを実践中

あらかじめ板書された「功罪両面から論じる小論文の書き方」がこの日の黒田先生の授業の課題。小論文のテーマ『調べ学習におけるインターネットの利用について』に対して、生徒たちは冒頭からグループに分かれて話し合いを始めた。配布された紙と付箋にインターネットの良い点、悪い点を書いていく。先生が伝えたグループワークで大切にしたいことは「グループで協力して話し合うこと」、「集中して取り組むこと」。

先生は教室を巡りながら、「残り時間1分です。できるだけ多く書いてみ

ましよう」などの声をかける。5分間で各班の紙には多数の付箋が貼られていた。その後、各班の意見をまとめた上で、生徒は自分で選んだ「悪い点」を一つに絞り、理由と解決策を考え、それをもとに小論文の構成を練っていた。

黒田先生は昨年、小杉高校赴任とともに、小林昭文先生のA-L研修会に参加した。物理の研修授業だったため、当初は国語科でのA-Lの取り入れ方がわからなかったという。

「その後、授業研究会を何度も経験して衝撃的だったのは、グループワークの際に口を出しすぎていると指摘されたことで、自分の課題だと発見しました。それは優れた実践者であつ

※1 取材時 ※2 大村はま「大村はま国語教室 第一巻」『単元学習と私』(筑摩書房 1982.11.30 初版 P.320-321)より

## 小林昭文先生からの アクティブラーニング型授業への アドバイス



産業能率大学 経営学部教授  
小林昭文先生

1952年生まれ。空手のプロを経て、埼玉の県立高校教員として25年間勤務したのち、定年退職、2014年より現職。河合塾 教育研究開発機構 研究員も兼任。教員時代にカウンセリング、コーチング、アクションラーニング、メンタリングなどを学び、最終勤務校では物理のAL型授業を実現。現在もその研究と実践、啓発活動に取り組む。

### リーダーシップと組織的な取り組みで 理想的なAL推進となる可能性に期待

本企画の連載スタートに当たり、小杉高校を推薦した理由は、米谷前校長の強いリーダーシップと、それに呼応する現場で中核となる先生方と、その先生方から徐々に全体へとAL型授業が広がっていく状態に、大きな可能性を感じたからです。

ある日突然、米谷前校長が研修会をやってほしいと現れたことに驚きました。研修会の依頼は、通常電話やメールですが、直接いらしたことに授業改革に対する並々ならぬ意欲と熱意を感じたのです。また、若手の教員を預かってほしいと頼まれ、右の斉藤匠平先生が産業能率大学に10日間やってきて、うち4日間はほぼ私に貼り付きで行動をともにしました。校長が若手教員の10年、20年先の資質形成にも尽力されているのだと思います。

AL型授業の推進に小杉高校のようなリーダーシップが欠かせないのは、ALのような新しい試みは、個人の先生だけでやろうとすると、当初うまくいかない場合に潰されてしまう可能性があるからです。リーダーが率先して取り組みればそれを防ぐことができます。

小杉高校はリーダーシップとコアチームの先生方の存在という両輪が揃っていて好スタートを切りました。教員間の横の広がりやAL型授業を発展させていこうと期待しています。

赤点だった生徒が平均点を超えることもありました」

斉藤先生は、富山県の「教師力向上支援派遣事業」で、米谷前校長が小林昭文先生に直接指導を依頼して派遣した先生だ。だが、斉藤先生は当初AL型授業に懐疑的だったそうだ。「授業研究を行った際に、数学科教員全体がALの進め方に対する良かった点、改善点などを協議してくれました。周囲の協力のおかげで授業改革に前向きになりました。そして、小林先生の研修で、工業化社会を目指した戦後の日本と、知識基盤型で変化の激しい現代では求められる能力が異なり、いま必要とされる能動性を

生徒に身につけさせるためにALは必要な授業手法だと聞いて、意義を納得できました」

小林先生から最も影響を受けたのは、小林先生自身が現在も向上心を持ち続けて新しい挑戦を実践していることと、個々の生徒をよく見て指導する、教員としての姿勢だった。「なんとなく感じていた『変化の激しい時代に対応できる生徒を育成するためには、教員が社会に合わせて変わっていくかねばならない』ということを実感しました。まだ教員としてのスタイルが確立していないので、楽しみながら柔軟に取り組むことが、自分の成長に繋がると思っています」

た故・大村はまが語っている、教員の発言が「深く<sup>※2</sup>考えている子どもほどじやまになる」という、基本と同じだったのです。それ以来、自分なりに工夫し始めました。効果的で最低限の声がけは難しいことですが、そこはまず、小林先生の真似をすることから始めています」

AL型授業とは生徒が自分で考え学習する時間を最大化させる授業であることから、型にとられずに国語科なりに達成させるアプローチがあるはずと思えるようになった。

目下の不安は、AL型授業で教員の想いが生徒に伝わるかどうかだ。「そのために、例えば今日は課題とは

別に、自分が福島の被災地を訪れたときの写真を見せて、話をしてみました。いまは試行錯誤の段階なので、ALに関する本を読んだり、理論や他の先生方の実践に触れたりして、自分の幅を広げていきたいです」

